

## 創立満100年を迎えて 昭和60年2月

滝澤勝人

当会が本年2月をもって創立満100周年を迎えたことは慶賀すべきことである。当会の創立は明治18年2月1日月報第1号を発行したことに始まっているが、これより先、明治11年頃より、「上田医学生会」「上田学生会」「上田郷友会」又は「上田学生親睦会」と称して会合され、倒れては起き起きては倒れるという状態であった。然るに、明治17年12月有志総会の結果、「上田郷友会」を設立することを決議し、その規約を制定すると共に、明治18年2月1日月報第1号を発行したことによって、当会が発足したのである。爾来毎月月報を発行すると共に、例会を開き、本年2月をもって創立100周年を迎えるに至ったのである。

このように当初は学生の集まりであった会員が社会に進出してからは、学界に医学界に或るいは実業界に活躍し、著名な学者、医師或るいは実業家を輩出するに至った。例えば、学者としては、人工タール癌成功者として世界的に有名な病理学者山極勝三郎博士、監獄学の草分けであり、かつ社会事業家として有名な小河滋次郎法学博士、更に創立後入会した会員中には事業家として嘗って私鉄王としてその名を馳せた五島慶太氏（後に運輸大臣もされた）、戦時中異色ある名士としては、金井章次医学博士がある。同氏は嘗って満鉄に招かれて、満州において活躍していたのであるが、昭和6年満州事変が勃発するや、関東軍に住民の独立国家建設を遂行し、軍の要請で内蒙古に赴き、徳王を首席とする蒙古連合自治政府を組織し、その最高顧問となり、蒙古の副王と呼ばれた人である。然るに同氏は軍の他、民族に対する措置に不満を抱き、昭和16年大東亜戦争直

前に辞職し帰国した。帰国後、郷里の上田市に帰り、終戦後は後述の滝澤七郎氏（筆者の父）の上田郷友会に出席している。

上記四氏の内、山極勝三郎博士、小河滋次郎博士は、何れも当会の創立者であるが、これらの人々と共に、当会のために貢献された宮下鈞太郎氏の名を挙げねばならない。同氏は、当会創立前の上田学生親睦会に18歳の時から関与し、その後上記二氏と共に、当会の創立に当たられ、創立後は幹事として月報の発行を担当され、又例会の世話もされ、年令90歳に達し、群馬県沼田町に引退されるまで、62年間の永い間、当会のために尽くされた。同氏は当会のために一生を終始されたと申しても過言ではない。

宮下翁が幹事引退後は、滝澤七郎が月報発行担当幹事に就任したが、この頃は第二次世界大戦が激しくなり、昭和19年頃は例会場であるレインボーグビルは連峰会館として集会することは認められたけれども、その会合を開くことがやがて困難となり、月報の発行も紙の配給不足のため、一時休止せねばならなくなった。これらのことは、名簿の「上田郷友会の起源及沿革」の章の「昭和18年3月以降の事」の項の前後に掲載されているので、参照され度い。

昭和20年8月15日第二次世界大戦は終戦となり、社会は一時混乱したが、上田郷友会は活力を回復し、昭和20年12月2日東京丸の内常磐屋の自由党本部の室を利用して、戦後第1回の例会を開いた。この時の出席者は17人であったがいずれも故人となっている。そして21年3月に戦後初めて上田郷友会月報として、現在の四頁のもの発行し、同月24日日曜日上田市新町の滝澤七郎宅にて茶話会を開いたのが上田例会の始まりで、爾来郷里部例会が開かれるようになった。又月報は従来「上田郷友会月報」という名称で発行されていたが、昭和23年6月より「郷友信濃」と命名した。これは郵税が1

部8円となっていたのを第三種郵便物とし郵税1部4円とするため  
で、会員組織でなく、会費でもなく、一般販売との理由によつたも  
ので、従つて、従来会費と称したものを誌代として徴収することに  
なつた。然し月報であることに変わりはない。そしてその発行部数  
は千部以上あることを必要としたため、会員増強に尽力し、この頃  
の会員数は1,300余名となり、当会創立以来最多数の会員を擁  
するようになった。

昭和38年1月11日月報発行担当幹事滝澤七郎が死亡し、子息の滝  
澤勝人がその後を継ぎ、現在月報発行担当幹事をしている。

今や、当会は創立満100周年を迎えるに当り、この光輝ある歴史を  
東京や郷里部の会員のみならず、全国及び北米支部の会員全部の意  
識の中に徹底して戴くためには、記念史の発行が最も適当と思われ  
たが、その執筆者が見当たらず、仮に見当つても時間的に間に合わ  
なかつたので、当会の名簿掲載の「上田郷友会の起源及沿革」は、  
歴史としては断片的であるが、一種の歴史を記述したものである。

——創立100周年発行の名簿の記事より——